

### 三人の文学者の記念

今年は折りよく三人の偉大な人物の生誕百年の記念があった。それでわたしの感想を少しばかり引き起こした。記念、——たとい文芸の国土内に限定しても、常にある事で、つまり世間で鳴り物入りで騒がれているダンテ六百年記念などが、その一である。しかしま言うところの三人は、文芸史上の過去の勢力ではない。彼らの思想は今でもまだ生命があり意義があり、現代人の悲哀にして真摯な思想の源泉である。だからさらに記念する価値がある。この三人とはフランスのフローベール(Flaubert)、ロシアのドストエフスキー(Dostoievski)、フランスのボードレール(Baudelaire)である。

フローベールの誕生日は十二月十二日、三人の中で彼が最も幼いが、事業の上では彼が最も早い。彼は一八五六年に『ボヴァリー夫人』を発表し、自然主義の先鋒を開いた。その頃ドストエフスキーはまだシベリアで苦役をやっており、ボードレールの『悪の華』はちょうど草稿中であつた。彼は労作二十年、たった五部の小説を仕上げただけで、本当に生命を芸術に捧げ、文芸の女神の孤独忠実な祭司であると言える。人生は短いけれども芸術は長い。彼の性格は、デンマークの批評家ブランデスが言うように二つの分子からなっている。“愚昧に対する火のような憎悪、そして芸術に対する無限の愛である。この憎悪は、あらゆる憎悪と同じく、憎悪する対象について一種不可抗力の牽引を感じる。様々な愚昧、愚行・迷信・自大・不寛容など、いずれも磁力のように彼を牽引し、彼を感発する。彼は一つ一つそれらを描き出さざるを得ない。”彼は厭世家ではないし、あるいは虚無主義者でもなく、一個の愚昧論者(Imbecilist)である。これはなんと適切な社会批評家の名称であろう。彼はまたスフィンクス(Sphinx)とキマイラ(Chimaira)——科学と詩——の抱擁を夢想し、自分は冷静にして敏感、真と美を愛する“冷血の詩人”となった。この冷血の詩人ということばは、以前は一緒に繋がったことはなく、彼が最初であつた。彼はモーパッサンの師たるに恥じないばかりか、またまさに以後と未来の詩人の師でもある。

ドストエフスキーはロシア暦十月三十日に生まれた、すなわち新暦の十一月十一日である。彼は社会主義の書を読んだために、死刑の判決であつたが、一等を減ぜられて苦役十年でシベリアに流された。飢え寒さ、拷問殴打から、てんかんを発症し、また困窮から死に至つた。だが彼は絶望厭世しなかつたばかりか、逆にこれによって信念はいよいよ堅く、彼独自の愛の福音を作り上げた。文学上の人道主義の思想の極致として、わたしはドストエフスキーを推さないわけにはいかない。トルストイですら一步を退く。彼が書いた長短十何篇かの小説は、ほとんど一つとして心魂を揺り動かさないものはない。彼の創作の動機は、まさに武者小路の言うように、“人生という寂寞と愛を肯定しようとして生まれたものである。……ドストエフスキーの最後の希望は、どのようにして生まれて人となる事を無意味な事にしないでおこうかとした努力から来たものである。”アンドレーエフは『小人物の告白』で、“わたしの運命に対する唯一の要求は、つまりわたしの苦難と死とが無駄にならないことだ”と言っている。これはまたドストエフスキーの要求でもあると言えよう。彼は小説で多くの“侮辱され損なわれた人”を書いた。彼らは足

下に踏みつけられ、汚い雑巾になったけれども、“そのべちゃべちゃに折りたたまれた中に、靈妙な感情が隠れている”のは、まさに我らと同じである。彼は下等な墮落した人間の魂を描き、そのなかにまだ光明と美が存在することを示した。彼は一人の人物を描きだす、それがどんなに墮落していようが、どんなに無恥であろうが、読者にある思想を起こさせて、書中の人物とわれわれはともに同じような人間であると思わせ、読者が読み終わって感嘆して、“彼はわたしの兄弟だ！”と言わしめる。これがドストエフスキーの著作の精義であり、彼がわれわれに残した最大の教訓であり、われわれが感激して記念すべきところである。（ここに旧訳の「ドストエフスキーの小説」のことは多く引用したが、原文は『新青年』第4巻に見える。）

ボードレールは四月九日の生まれである。彼の十年の著作は、評論、翻訳以外に、ただ詩集『悪の華』一卷、『散文小詩』及び『人工の樂園』各一卷があるきりである。彼の詩には病的な美が充満している。ちょうど貝類の中の真珠のように。彼はのちの退廃派の文人の祖師であり、神経病学者のロンブローゾのいわゆる風狂の天才であり、トルストイは社会主義の眼光を以て彼を批評し、まるで了解できない作家だと言った。彼の緑に染めた頭髪と変態的性欲は、われわれは一つの伝説（legend）としてのみ承認する。彼は確かに精神病院で死んだけれども。われわれが完全に承認しかつ親近感を覚えるのは、彼の“頹廢的な”心情とその心情を表現したところのわずかな著作の美とである。“ボードレールは人生を愛し重んじ、美と幸福を慕い、伝奇派の詩人を異としなかった。ただ幻滅の時代に際して、絶望の悲しみは、いよいよ深く切実になり、そして現世に執着することが特に断固としていたから、理想の幸福が将来できない以上、また世を捨てて安息を求めることをも欲しなかった。故にただ努力して生を求め、苦中に樂を得、悪と醜の中に善美を得て、新奇な享樂を得て、官能を刺激し、いささか生存の意識を保とうと欲した。”\*彼の容貌は頹廢に似ているが、実はただ猛烈な生を求める意志の表現にすぎず、東方式の泥酔の気晴らし生活とは、絶対に違う。いわゆる現代人の悲哀は、つまりこの猛烈な生を求める意志と現在の不如意な生活との抗いである。この抗いの表現はさまざまな改造の主義となりうる。文芸上ではフローベールの芸術主義、ドストエフスキーの人道主義となり得、またボードレールの頹廢的な“悪魔主義”にもなり得るのである。

わたしは上でこの三人の偉大な人物の精神を略述した。“テーマにかこつけた”に近いことは免れぬけれども、だがわたしは中国現在の蕭条とした新文学界には、この三人が代表する各派の思想は、実に一服の極めて有力な興奮剤であり、従って記念しかつ提唱するに値すると確信する。新しい名目の旧伝奇主義、浅薄な慈善主義が、いま新聞雑誌にあふれている。日本の京都にいる友人の話では、留学生の中にもすでにコーヒーを飲んでアブサン(absinth)の代わりにする自稱頹廢派がいるということだ。各人がどの一派を提唱しようと、もともと自由な事だ。だが現在はどうも切実な精神を欠いていて、“古い酒瓶に新しいレッテルを貼った”だけのように思われる。みんながそれぞれに各人の好みによって、まず写実時代の自然主義、人道主義、あるいは頹廢派の代表人物と著作を、ざっと研究してから、自分のゆく方針を決めるよう希望する。新伝奇主義にしても、写実の洗礼を受け、頹廢派の心情を経て出て来たものであるから、その面にも注意すべきである。でないとなやすく旧伝奇主義になってしまう。わたしもこれらの言葉は僭

越であることを知っているが、この三人の文学者の記念に感じて、言わないわけにはいかないと  
思った。だからいささか書いて自分の心を落ち着けてみた。一九二一年十一月十一日

※初出：1921年11月14日『農報副刊』

---

\*引用文の出典未詳。